

第6 1回全国公立学校教頭会研究大会滋賀大会 <第6分科会 報告>

大分県公立学校教頭会 会計 竹中恵子

1 「全国公立学校教頭会の調査」の報告

第6分科会では、最初に、平成30年度に実施した全国公立学校教頭会の調査の結果と分析の報告がありました。時間と労力を費やす職務として、「とてもそうである・ある程度そうである」と答えている割合で1番多かったのが、各種調査依頼等への対応でした。

ほかにも、保護者・PTAとの連携、地域との連携、施設管理や苦情対応、特別な支援を要する児童・生徒の指導、集金滞納者への対応等々、教頭の業務は多岐にわたっていることを改めて感じました。

近年、全公教の調査結果が新聞報道等で取り上げられ、また文部科学省、各都道府県教育委員会等の教育行政、または国会議員等から全公教としての意見具申を求められているとのこと。そして、次の4点の要請を行っていることを聞き、アンケートがこのように生かされていることを知り心強い思いがしました。

- ① 主幹教諭の全学校への配置
- ② SCやSSW、スクールサポートスタッフなどの人材配置
- ③ 校務支援システムの全校導入
- ④ 義務教育の全学年35人以下学級とする教員定数改善

2 講演「続・学校における働き方改革 ～副校長・教頭としての役割～」を聞いて

次に、東北大学大学院准教授の青木栄一さんの講演を聞きました。副校長・教頭が生き生きと働くために、超長時間労働の実態を調べたこと、そしてその改善方策について具体的に話してくださいました。数値が小さい業務こそ、過度な負担となっている可能性もあるということ、教員不足により教育界の持続可能性が危険水域に入ったということ、20代の教職離職率が上がっていることなどが実態として挙げられました。

そのために学校としては「自分で考える」ことが求められているということでした。学校の業務については文科省等からの直接の言及はないため、これまでの既成概念に縛られず、メリハリをつけた業務改善を「働き方改革」が叫ばれている「今」、各学校の実態に応じて大胆に行っていくこと、このチャンスを逃してはならない、ということが心に強く響きました。

3 グループ討議について

午後は、グループに分かれて自校の働き方改革を書いたシートをもとに、話し合いを行いました。私のいたグループ(9人)では、どの県も校舎の開錠施錠を教頭は行っていないということを知り驚きました。そして、各グループで「働き方改革一押しプラン」を考え交流を行いました。運動会を半日にしている学校や、小学校高学年で教科担任制を取り入れている話、もぐもぐタイムやリフレッシュルームの設置などの話も聞き、なるほどと思うこともありました。職員の、そして何より自分の「命」を守るため、小さなことでもできることをできるところからしていこうと勇気をもらった1日となりました。